

2. 地域アイデンティティの基盤としての民俗舞踊の身体感覚

岡本 純也

I. はじめに

埼玉県西部で育った筆者は、毎年、小学校の運動会の演目で「秩父音頭」を踊った記憶がある¹。小学校卒業以来一度もこの踊りを演じる機会にはめぐり会わなかったが、試みにインターネットで「秩父音頭」を検索し、懐かしい旋律に合わせてさまざまな踊り手が踊る映像を見ると、それに合わせて自然に身体を動かせる自分に気づき驚いた。30年以上も前に習った踊りの振り付けを身体が覚えていたのである。同時に、どのような踊りが「うまい踊り」であって、「うまく」踊るためにはどこをポイントにするべきなのかを認識できている自分にも気づく²。「昔取った杵柄」とはまさにこのことであるのだろうが、高校を卒業してからほとんどを埼玉県外で過ごし、埼玉県民であったことをあまり意識したことのない自分の身体に、「埼玉」の記憶が深く刻み込まれていることは非常に興味深い。

筆者にとっては身体に刻まれた土地の記憶が直ちに埼玉県に育ったというアイデンティティに結びつけられるものではないが、実は一度刻印されたら生涯忘れることなく、意識的に払拭しようとしても取り除くことができないという、民俗舞踊が与える身体感覚は、自己と生まれ育った地域を結びつけ、ローカルなアイデンティティの基盤となるものではないかと考えられる。すなわち、その踊りが「踊れる者が住む土地＝自分たちの土地」と「踊れない者の住む土地＝自分たちの土地以外の土地」を身体レベルで分ける感覚である。ここでは、舞台を埼玉から沖縄に移し、沖縄の各地で伝承されているエイサーを中心に扱い地域アイデンティティの核となる身体感覚について整理していきたい。

II. 踊りの習得によって共有されるシマの境界

「シマが本番、他シマは遊び」という言葉は、沖縄県勝連町（現うるま市）平敷屋^{へしきや}でエイサーの調査をしている際に青年会の踊り手から筆者が聞いたものである。中学卒業以来エイサーの太鼓を打ち続けているベテランの踊り手は、「生まれ育った土地が本気で踊る場、それ以外の土地では気楽に踊れる」といった意味でこの言葉を用いており、特に、旧暦の盆に拝所（土地の神を祀る聖地）前と地元の小学校の校庭（地域住民の前）で踊ることが非常に緊張するということを強調していた。エイサーを踊る青年会は、旧暦の盆には彼ら・彼女らが生まれ育った「シマ」（字や部落とも呼ばれる市町村の下位の行政単位）^{あざ}で踊るが、旧盆の前後の時期には各地で催される祭りに招待されることが多い³。そのような文脈において、踊り手には「シマ」と「シマ」以外の土地を明確に分ける感覚が共有されている。では、彼ら・彼女らが共有している生まれ育った土地とそれ以外の土地に分ける感覚の源泉とはどのようなものであろうか。

「シマにはすごい先輩たちが多いからさ」とベテランの踊り手は、「シマ」でエイサーを踊ることの特別さを語る。すなわち、踊りを見せる観客の中にかつてのエイサーの踊り手が多く含まれているがゆえに「シマ」が特別であるというのである。「力を抜くとすぐに分かってしまう」先輩たちの前では、最初から最後まで緊張しながら踊らなくてはならないという。

沖縄の旧暦の盆に踊られるエイサーの踊り手は主に地域の青年会の男女である。地域によって青年会の資格年齢は異なるが、15歳～30歳ほどのその地域に住む青年層が対象になる。そして、旧盆までの一ヶ月ばかりの期間、毎晩のように練習を行いエイサーを身につけるのである。このよう

なことが、毎年、何十年と繰り返されると、エイサーが伝承されている地域では一定年齢より上の層は踊りを習得した「目の肥えた」観客たちばかりということになる。「シマが本番、他シマは遊び」という平敷屋のベテランの踊り手の言葉は、この「目の肥えた」観客の濃淡、もしくはエイサーを評価する「まなざし」の強さによって「シマ」とそれ以外の土地に境界を明確に認識しているということを表現した謂いなのである。

この「まなざし」の強さは、時に、具体的な「力」として踊り手の身体を矯正するように働く。平敷屋では基本的に青年会に所属する年長者が盆までの練習をリードして踊りの指導にあたるが、旧盆当日に集落内の家々を巡ってエイサーを踊る際には、青年会の OB らによって衣装の着方や太鼓の打ち方などの指導がなされることがある。公式な練習の場で OB が指導をすることはほとんどないが、酒も入り、小さな庭でエイサーが踊られるような場面において頻繁にそのような様子が観察された。「シマ」で踊る青年会の踊り手が手を抜けない所以がここにある。



図1. 旧盆に踊られる平敷屋のエイサー
：集落内の家を廻る際には青年会 OB の飛び入りも頻繁に行われる。

Ⅲ. 身体レベルの世界の分節化と踊りの習得

上にみたように、エイサーの踊り手は、エイサーを身につけることによって「シマ」とそれ以外

の地域を分ける感覚を共有している。それは、身体感覚によって世界を分節化しているとも言えるかもしれない。

かつて哲学者の市川浩は「社会的空間に生きる」主体が「<身>」によって世界を分節化することを「<身分け>」と呼んだ⁴。ここで市川が用いる「<身>」とは生理学的な意味で存在している身体を指すだけでなく、社会的に作り上げられている身体がもつ感覚をも含めた概念であり、「<身分け>」といった場合、言葉などの記号によって世界を分節化する様式でなく、身体感覚レベルでの分節化を指すものである。われわれは「レモン」や「オレンジ」という言葉（記号）を知る以前から、舌によって両者の果汁の味の差異を知覚し、あの黄色やオレンジ色の果実に対して、それぞれの味を対応させることができる。このように身体の機能によって世界を分節化していくことを市川は「<身分け>」と呼んだのである。

そのように考えるならば、エイサーの踊り手は、踊りを身につけることによって、自らが踊る世界について独自の「<身分け>」をするようになっていると考えられないだろうか。

「目の肥えた観客」の濃淡によって「シマ」と「他シマ」を分けることもその一つの例であろうが、他にも例はみられる。たとえば、平敷屋においては、集落内の一本の道を隔てて青年会を「西」のグループと「東」のグループに分け、それぞれが「異なる」エイサーを踊っている。両者の踊りについて平敷屋では「東の踊りは力強く『男性的』」であり、「西の踊りは動きが柔らかく『女性的』」であると説明される⁵。しかしながら、その差異について、筆者のような外部から来た者にとってはなかなか判別し難く、何度となくその踊りを見てもどこが両者の踊りを分けるポイントになっているのか理解できないのである。外部の者にとっては微妙な差異であっても踊り手にとっては明確な違いであり、それを表現したのが「男性的」、「女性的」という表現なのであろう。このような、身体感覚レベルで感じる差異を、特定の地域やグループに結びつける世界認識の仕方は、市川のいう

「＜身分け＞」に相当すると考えられる。

踊りの差異を通して地域を認識するということに関して、エイサーはもう少し広がりを持った「地図」を提供する。うるま市の平敷屋の周囲には饒辺^{のへん}、内間^{うちま}、平安名^{へんな}、屋慶名^{やけな}、与那城^{よなしろ}、西原^{にしはら}、照間^{てろま}、南風原^{はなえぼる}という集落があるが、それぞれが独自のエイサーを旧盆には踊っている。うるま市の与勝地域には総じてパーランクーという小型の片面太鼓を打ち鳴らすエイサーが伝承されており、エイサーを踊ったことのない者にとっては踊りを見てどの地域のエイサーかを判別することは難しいが、エイサーの踊り手やその経験者に聞くと、明確に地域間の踊りの差異というものが実感できていることが分かる。言葉によって地域ごとの特徴を表現することはできないが、彼ら・彼女らの頭の中の地図には、それぞれの地域のエイサーがその特徴によって割り振られているようである。そのような地図が描けるようになるためには、それぞれが生まれ育った地域で、エイサーの踊り手になる必要がある。逆に言えば、エイサーを身につけるということは、自分が生まれ育った地域を、踊りの差異によって描くようになるということでもあり、その図の中に自分という存在を、また、踊りを共有した「自分たち」という存在を明確に位置づけることができるようになるということである。そして、一度身につけてしまった踊りは、30年以上たっても筆者の身体が「秩父音頭」を覚えていたように、生涯忘れ得ないものとなり、また、その身体レベルで世界をとらえる感覚も生涯継続されると考えられる。

IV.まとめにかえて

近代以降、地域の生活習慣の変化、人々の流動化などによって民俗舞踊は消失していく文化としてとらえられてきた。しかしながら、各地の民俗舞踊は近年、ますます盛況になっているようにもみえる。冒頭に紹介した「秩父音頭」に関してみれば、発祥の地である皆野町はホームページで「秩

父音頭のふるさと皆野⁶⁾と自分たちの町を紹介し、毎年8月14日に「秩父音頭祭り」を開催し、現在では60団体1,200名を超える参加者があるという。エイサーに関してみれば、これまで筆者が報告してきたように⁷⁾、沖縄県内だけでなく県外の地域でも「エイサー祭り」が行われるほど盛んに踊られるようになっている。このような現象が起こる背景には、観光化の進行により、観光の目玉として「他では見られない文化」である民俗舞踊の価値が高まったということもあろうが、ここで見てきたように、踊りの習得というものが本質的に、身体感覚レベルで踊り手と地域を結びつけるという作用をもつためではないだろうか。すなわち、民俗舞踊の経験者には「自分たち」の文化を表象する（Represent：代表する）ものとして当該舞踊を認識する視点が共有され、そこで醸成される地域の一体感といったものが地域活性化につながると考えられるため、各地で盛んに踊られるようになったと。そして、そのような認識の基盤となるのがここでみてきた民俗舞踊が踊り手に与える身体感覚なのではないかと考えられるのである。

【注】

¹ 現在の「秩父音頭」は秩父地方の皆野町周辺で近世より伝えられた盆踊りを、昭和初期に地元の俳人金子伊昔紅が公募した歌詞を付けて復興させたものである。皆野町観光協会の説明によると、昭和25年に「埼玉県下小中学校の集団技に採用」とあるので、この文脈で筆者は「秩父音頭」を運動会で踊ったものと考えられる。

浅見清一郎「秩父音頭のこと」,大川原正編『秩父郷土史報』,秩父市立秩父図書館,1954年,77-80ページ

皆野町観光協会ホームページ,「秩父音頭について」
http://www.minano.gr.jp/chichibu_ondo/

² 筆者の出身小学校には、当時、「秩父音頭」の復興期(1930年代)に秩父で育ったベテランの教員がおり、彼女の優美な踊り方が範型として今でも思い出される。

³ 沖縄県内のエイサーに関しては、沖縄市企画部

平和文化振興課編,『エイサー360度—歴史と現在—』,沖縄全島エイサーまつり実行委員会,1998年参照のこと。

⁴ 市川浩は「<身>」について、以下のように記述している。

「……われわれと世界、われわれと空間との関係系は、決して切り離すことができない本質的なつながりにおいてある。実存哲学の『世界内存在』という用語をもじっていえば、われわれは『空間内存在』である。

そのような生きられる原点にあるものを、私は<身>ということばであらわしたいと思います。大和ことばの『み(身)』なんですけれども、なぜ『身体』ではなくて<身>を使うかと申しますと、『身体』という場合、身体は物理的空間の一点にある。しかし単にそれだけではなく、同時にわれわれは社会的空間の中で主体として生きている。そういう生きられる空間の中での主体のありかとしてのここを示すことばとしては<身>が適切ではないか。というのも、<身>ということばは、

『身と皮』という場合の肉ばかりではなく、『身が知ることか』とか、『身を立てる』とか、『身をもって示す』という個人的かつ社会的な人格的主体を含めた主体的-客体的なわれわれの身体存在のあり方をよくあらわすことができるからです。そういう意味で<身>ということばを基本概念として使いたいと思います。」

市川浩,『<身>の構造—身体論を超えて—』,講談社学術文庫,講談社,1993年,139-140ページ

⁵ 平敷屋字誌編集委員会編,『平敷屋字誌』,平敷屋自治会,1998年,188ページ

⁶ 皆野町ホームページ参照

<http://www.town.minano.saitama.jp/>

⁷ 岡本純也,「グローバル化とローカルな身体文化の活性化—『沖縄』に関する新聞記事の内容分析を手がかりに—」,『一橋大学スポーツ研究』,2012年,73-76ページ